
刺激の女神

青草 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刺激の女神

【ZPDF】

Z4876D

【作者名】

青草 心

【あらすじ】

「ごく普通の平凡な毎日を過ごす専門学生 零治。彼はそんな自分の生活に不満を持ち始めていたが……ある晩、突如やつて来た謎の少女によつて彼の生活は思いもよらぬ方向へ……？」

(前書き)

ホラーが苦手、という方にも読みやすい内容に仕上げました。細部に盛り込んだストーリー展開にも注目下さい。

朝10時起床。

昼0時までの2時間で約1本分の映画を鑑賞する。

昼1時までに御飯を胃にたらふく押し込むと決まってゲッ普する。それから夕方5時までは専門学校でつまらん授業、…終えると一直線に帰宅するわけでもなく、ビデオ屋『激安1番』へ通い、お気に入りのビデオ・DVDがあればレンタルしている。

そんなカンジで俺の1日は終わり、また朝はやつてくれる。
毎日同じ事をして、まるでリフレーンのようだ。

ホントつまんない男だな~と、しみじみ 思う。

なんとなくで生きていたら、あつという間にもう2年か…。東北のド田舎から親元を離れ、やつとの思いで上京してきた俺は、明日の賢人を夢見て都会へやつてきた。ー…ものの、現状がこれじゃあ何のために生きているのかすら分からなくなつてくる。

安い家賃のボロアパートで1人暮らし。

お金は実家からの仕送り月7万円でなんとかやり過ごしているのだが、最近…何かが足りない…。

愛か…それとも女か…いや、そんなものはどうでもいい。

今の俺の生活に欠けているもの…それは”刺激”だ。

毎日の生活が平凡すぎて、もう腹の虫が収まらん!ムカつく。

イライラするこんな時は寝るのが1番 … つて、それだとまた平凡な毎日がやつてくるだけで何も変わらん!

「んー…」と真剣に頭を抱え込む俺。とそこに1人の訪問者が現れ

る。

ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン…。

何度も呼び鈴鳴らさんでも分かる一つのにそこには鳴らすのを止めない。

「分かつた分かつた今までよー。クソ、考え方してんのに…まつたく」

俺は何の警戒もせずにチャーンロックを外して、めんべくさげにドアを開けた…とその瞬間、田の前の世界がグラつと揺れた。と思うとすぐにその謎の揺れはおさまった。

何だつたんだ今…地震か！？

突然の不思議な現象に戸惑う俺だが、冷静さを取り戻し、動転した黒田を焦点に戻した。

すると開けたドアの前に人の姿はなかつた。再度辺りを確認してみると、人の姿は見当たらない。

そうだよ。おおかた何かのサイレンの音と家の呼び鈴を聞き間違いでもしたんだよな。

もう真夜中の0時を針は指しているのに他人のお宅を訪問する奴なんて普通いやしない。と、ドアを閉め、後ろを振り向いた瞬間…！

そこには7歳くらいだろうか、真っ赤なドレスに白い肌の長い黒髪が印象的な少女が立っていた。

「うわああーー！」

俺はこわばつた表情のまま、その少女から少し距離を置くと、勇気を振り絞り言つた。

「…君は誰だ！…」いつの間に部屋に入つたんだ！？

足のすくむ思いで殆んど呟くように言つた。

するとその少女から思いもよらぬ答えが返つて來た。

「レ…イジ…ハ、シゲキガ…ホシ…インデ…シユ…？」

レイジ…『零治』は俺の名前だ…！

何故、この子は俺の名前を知つてゐるんだ？

以前この子と何処かで会つたかな…訳がわからん…！

そんなパニクる俺を尻田にその少女は何かツブやくみつて呟つた。

「レ…イジ…ハ…ドンナ…ノガ…ホシ…イ…ノカナ…？」

少女の顔を見ると、長い髪で田は被さつていてあまりよく見えないが、大きな口がにんまりと笑みを浮かべてゐるのがハッキリと分かる。

何なんだ！…この子供は…いきなり現れたかと思えば、訳の分からん事ばかり言いやがつて…シゲキがどうとか…！俺はそんなもん…？…シゲキ？

シゲキつてこの子供…もしかしたら、もしかするかもしれない…。

「…君は俺をこの平凡な生活から脱け出さず為に來てくれたのか…

?いや、そうだろ！？そつか、刺激だ。君は俺の平凡な毎日に刺激を与えてくれる…！俺に刺激を提供する為に君は現れてくれた！」

ありがとう、ありがとう、と一方的にそう解釈した俺は、訳も分からず嬉しくなって、とりあえずその少女の手を握り何度も手を縦に振った。

その正体不明の少女を”何か”も理解せずに…。

刺激以外の事を考えられない今の俺は、その少女に1回目の依頼をする事にした。

「俺はさ、何かの事件やその現場に居合わせた事がなくて、一度でいいからそういう場面に遭遇してみたいんだ。そんな事、普通の人には立ち会えないだろうからさ～憧れてんだ！ちょっと無理な注文だよな～」

俺は無理を承知で、「冗談をかして言つてみた。すると少女はすぐに返事を返す。

「レ…イジ…ワカツ…タ…ヨ…」

！！：はは、マジかよ。と相槌を打つ。

そしてその少女は去る間際に一言、

「アシタクル」

アシタ… 明日になれば分かるつて事だよな?

その少女が去った後、俺は布団にもぐり込み、東京ある明日を夢見
て、深い眠りに落ちた。

次の日の朝、さつそく俺に刺激が訪れた。

朝起きると、何やら窓の外が騒がしい。見ると5、6台の救急車や、消防車が止まっている。

その付近は近所の人達でざわついている。どうやら、俺のアパートの2つ隣の家が小火が原因で全焼してしまつたらしい。

目覚めた頃は既に火が消し止められた後だつたが、もう少し消防車の到着が遅れていたら、火が隣々に移つて俺の住んでいるアパートまで火の海になつていたかもしれない…。いや、危なかつた。

「…でも、まだまだこんなんじや刺激された内には入らないな…」

俺は不満を知らぬ間に口にしていた。

だつて自分が何かに巻き込まれるような刺激じやないと…あまり実感がないんだよな…。

それから数時間後、それは学校の帰りのバスの中で起きた。

俺はいつもバスに乗り遅れてしまった。それで仕方なく次くるバスに乗る事にしたんだ。たまたま俺が今日乗り合わせたバスは何と…バスジャックされてしまった。

きたきた これだよ、俺の求めていた刺激は…！

「おい！そこのお前、さつきから何ニヤニヤしてやがる！ちょっと面貸せや！」

犯人の1人が顔をニヤかせていたつもりのない俺を指し言つた。

うわ、ヤバいよ。この状況……！

でも、すごくワクワクしてんのは気のせいかな？

「俺ですか……？」ボソッと小声で言い、いらぬ確認をした。

「あ？お前の眼は節穴か！？俺が指さしているのはお前以外の誰でもねえんだよ……！こんな状況でニヤつきやがって……気味の悪いガキめ……！」

40代後半を越えていると思われる犯人の1人は言う。

犯人は2人組で1人は青色の顔面マスク、もう1人は白色を被つていて顔は見えないが、2人共拳銃を構えているので、誰も逆らえずいる。車掌さんは勿論のこと、この緊迫した状況の中で犯人に勇敢に立ち向かつていけたら、すごくカッコイイだろうな……！と妄想していると、俺はさらにニヤけた顔になってしまふ。

そのニヤけ顔が犯人を挑発してしまったのかは分からぬが、白衣マスクの男が銃をブツ放した。

ガシャーン……！

窓ガラスの割れた音が車内に響く。それと同時に乗客の悲鳴も響きわたる。

「ウルサイ、黙れ！」と白衣マスクが一喝すると、とうとう犯人は近くにいた乗客の腕を捕らえ、銃口をその乗客のこめかみに押さえつけた。

場内は一気に緊迫した空氣に包まる……と同時に俺のワクワク度

も一気に高まった。

銃の引き金を引こうとする犯人…

「やめて……誰か助けて……！」

さすがにもう、止めなきやと一聲を放とつとしたその時……

「その女性を解放しなさい……！」

俺のすぐ後ろの席から男性の大きな声が犯人達に向けられて放たれた。

見るとその男性は容姿はあまりガツチリしたタイプでもなく、度胸がすわっているとも思えない随分な優男だった。

チツ！せっかく俺が格好よく決めようと思っていた所を……と言つても、犯人に返り討ちにあうのが目に見えているけど……。こんな優男に何ができるってんだ、続けてその優男は言つ。

「その女性を解放してくれ！その代わり僕が人質にならう

！！！

何言つてんの、この人。自分を犠牲にしてまで見ず知らずの人を助けようなんて、格好つけすぎにも程がある……呆れたもんだな。すると白マスクの男は馬鹿にした笑みを溢すと、その条件を軽く承諾した。

おそらく犯人も思ったのだろう。女性を人質に捕るのも、この優男を人質に捕るのも変わらん……と。俺もその考えには同意するよ。

その後すぐに女性は解放され、優男は前言通り人質となってしまった。

それじゃあ何の意味もないじゃないか。と思つたその時……！

優男は犯人達の油断した隙をついて、まず白マスクの手首を強く掴むと、その手に持つていた拳銃を上手く取り上げた。次にもう1人の青マスクのこめかみにその銃口を押さえつけ、倒れ込んだ白マスクの上に乗りかり、あつという間に2人の犯人を押さえつけてしまつた。

まばたきも出来ぬ一瞬の出来事だった。

すると優男は言つた。

「僕は警官だ。一緒に乗り合わせたのが運の尽きだったな」

すゞく切れた捨て台詞を吐くと犯人達は言つ。

『参つた……』

完全に諦めモードに入つてしまつた犯人達に俺はガッカリする。
……俺はこういう奴が大嫌いだ。完璧な奴、正義面する奴、格好つけてがる奴、自信に満ち溢れている奴。見ていると怒りが込み上げてくる。

この警官がいい例だな。

バスの乗客は無事解放され、さつく皆の注目の的となつていたのは、先程の優男警官だった。

警察の事情聴取からも解放され、ようやく帰宅できると思つた俺だつたが、優男警官に声をかけられ足止めをくらつた。

「なんだよ、まだ何か用ですか？さつと帰してくれ。ただでさえ、苛ついてんのに！」

そして優男は静かに話し始めた。

「確かに君だつたな…。あの2人組を挑発し、怒らせたのは…」

「そんな事、…してないですよ」

俺のその軽はずみな態度にムッときたのか、今まで冷静だつた優男の口調が少しキツくなつた。

「君が…犯人を怒らせた自覚がなくても、何がキツカケで犯人達が逆上し、人を殺すとも限らないあの状況下だ。自分があの時、何を為すべきか冷静になれば判断できた筈だ！君は世の中を甘く見過ぎている！今に君のその誤った考え方が君自信を苦しめる！これを機にその考え方を見直しなさい…！君の為だ」

やつぱりな。コイツは正義感の塊のよつた奴だ。コイツの話を聞いたら余計、腹立たしくなつてくる。

何が君の為だ…！！

「…ツ余計なお世話だよつ…！」

俺はこんな奴に構つてられる程、暇じやないんだよ…

あー、もつ！凄えムカつく！

早く次の刺激が欲しい…！！

次はやつぱり”アレ”だよな…！

今日一日での女の子が、俺に刺激を『えてくれる女神の様な存在だつて事が証明されたわけだ

今日も真夜中の〇時になればやつて来る。楽しみだな。

俺は帰宅するとまだかまだかと、首を長くして真夜中の〇時になるのを待つた。

そして時計の針は〇時を指した。

ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン…。

わつそく家の呼び鈴が鳴り始めた。

待つてました と言わんばかりに、玄関に向かいドアを開けた。

するとやはり昨日と同じ、既に少女は俺のすぐ後ろに立っていた。

そして少女は言つ。

「…ツ…ギハ…ドンナ…ノガ…ホシイ…？」

俺は既に用意していた刺激案を簡潔に話すと、少女は少し間をおいて返答する。

「……レイ…ジ、ワカツ…タヨ…」

よじつ。と言わんばかりに俺は喜び、またその少女の手を握ると、勢いよく振り感謝した。

「…ア…シタ…クル」

少女は以前と同じ言葉を残し、去つて行つた。

：前から気にはなつてたんだけど、”アシタクル”つていつ言葉には一体どんな意味があるのでだろう？

俺はその疑問を口に出さぬまま、明日を迎える事になる…

…チチユン。小鳥の轉ずりが聞こえる。

今日もまた刺激的な1日が始まるんだ。

と思つて普段通り過ごしていたが、今日はなかなかその刺激的な事が何も起きない…。

あれ？…昨日は確か朝起きた時から刺激があつた筈なのに、今日は昼を過ぎても何も起きない…？一体どうしてだ？

確かに昨夜お願いした筈なんだけどな…。やっぱりあの依頼内容は難しかつたかな…？俺とした事が失敗、失敗。

でもまだ夜がある。気長に待つてみよう！

：学校の帰り道、バスを降りて5分程歩くと、俺の住み処であるオンボロアパートが見えてくる筈なんだが…、今日はいつに見当たらない。

あれ？俺…バス違う所で降りちゃったか！？いや、そんな訳ない。確かに俺がいつも降りてるバス停だった。

その後も町中を歩き回つたが、どこを見回しても俺の住み処は見つからなかつた…。いや、それどころか町の様子がいつもと違う…

！！

現時刻はまだ夕方6時もまわっていないといつに、辺りに人の姿が1つも見当たらない！

……絶対、変だ。何かがオカシイ！！

俺の中でどんどん焦りが募つてゆく……。

ハア……ハア……ハア……！！

息の切れる音がする……。こんな事は初めてだ。

俺は中学、高校とずっと陸上をしていたから、走るのは慣れっこな筈なのに。それ程の距離と時間を走り続けているんだろう……。一体何がどうなつてんだ！？俺の家は！？町の皆は！？

俺の足の動きがそこで一度止まった。

「……あつ……交番だ！今かすかだけど、人影が見えた様な気がするつ

俺はすぐさま交番の中に駆け込んだ。
しかしそこに人の姿はなかつた。さつき俺の見た人影は交番人形の模型だつた。

「……くそつたれ……！何が起きてんだ！？訳が分からん！」

俺の精神状態はもう限界に近い。

くそつ苦しい……どうしてこんな事に……ビビりじて……！

……！

俺はそこにある事を思い出した。

そういえば昨日…あの女の子に依頼をしたんだつた…。

『君に任せる。…俺に1番の刺激を味あわせてくれ

1番の刺激…これがそうだつたのか…?

世の中の人達が居なくなつて…自分の帰る場所がない…その世界で生き続けなきやならない…。

こんなのは刺激なんかじゃない。ただの『退屈』だ。

…俺は笑つた。

奇声に近い笑い声で。

声が枯れ、喉が渴ききるまで笑い…泣いた。

それから2時間程して、あつという間に辺りは真っ暗になつた。闇の静けさが俺の心を埋めつくす。

どうしてこんな事になつてしまつたんだつ…?

その一言だけが、心の中で繰り返されている。

この世界を元の世界に戻せないだらうか…。

俺を普段の生活の中に、誰でもいい…!
戻してくれ!

俺はいつの間にか街灯の灯す光を頼りにして、どこかへ向かつてい
た。それがどこなのかは、俺自身わからないでいる。

けど俺の足が自然と動いてくれて、何も考えられなくなつた俺を運んでくれているようだ。

そういえば…今何時だらう?時計はどうだ?

あ、今日は腕時計をしてたんだつた。腕時計を街灯の光に照らしてみると…、もう時計の針は夜11時55分を指していた。

…と、ここで再び俺の足の動きがピタリと止まつた。

ここが見覚えのある場所である事に気付く。

確か…ここのは昨日、全焼した家じゃないか……といつことは向かって右隣2軒目が俺のアパートの筈…!

「……………?」

俺は目を疑つた。

今日の昼まで建つていた筈のボロアパートは、姿形もなく…、目の前に広がるのは何もないただの空き地だつた。

「そんなん…」

俺は言葉を失う。

肩を落とす俺の背後から、聞き覚えのある声が話しかけてきた。

「…レ…イ…ジ、レイジ」

俺はすぐさま後ろを振り返り、闇に映えて見える赤いドレスを着た少女に叫ぶ。

「俺を…元の平凡な生活の中に戻してくれ…頼む。こんな周りに

誰もいらない世界や自分の居場所のない世界なんて望んでなかつた！頼む。頼むから元の世界へ戻してくれ！！！」

するとその少女は静かに口を開いた。

「……レイ……ジ……アシタハ……コ……ナイ……」

「？」

少女の言つた言葉の意味が理解出来ないでいる俺に、今度はハッキリと通じるよつた。言つた。

「レイジー……アシタハ……モウ……コナイ」

「……？」

少女の口は大きく裂け、まるで笑つているよつだ。

少女は手で自分の目に掛かつた前髪をかき分けて言つた。

「ニンゲン……ガ……イチバン……シゲキテキダト……オモエルシュンカンハ……ヨリモ……オソロシイモノ……ヲ……モクシシテシマッタ……トキダミ……コソナフウニネ」

少女は今まで前髪で隠れていた顔を俺に見せて、最後にそう言い残した。

俺はその少女の言つた世にも恐ろしいものを直視してしまい、ショック死するほどの刺激を身をもつて味わつたのだ。

……零治の遺体は、死んでから3日目の朝に彼の部屋の玄関先で発

見された。

俺はその少女と出合つたその瞬間に、絶命していた……。

： 決まって真夜中の0時にやつてくる少女……。

その正体は分からぬまま、闇に消えた……。

心に闇を抱える人間の元に少女は必ずやつて来る。

真夜中の0時にインターホンがなるような事があれば、決してドアは開けない方がいい……

【END】

(後書き)

刺激も大切です。何かを創作する上で必要不可欠なものだと思いま
す。…しかし何気ない平凡な日常の中にこそ、発見や刺激を受けた
りするものなのだと、私は考えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4876d/>

刺激の女神

2011年1月20日00時11分発行